

75周年記念誌より

7.1.4 昭和40～60年代

【書き下ろし】

d) 臙脂黄色ストライプジャージと仙波組

久米 秀俊 (S51 OB)



私が入学した当時は、ジャージ赤、パンツ紺が第1ジャージだったと記憶している。2年生になって、臙脂・黄色のストライプがOBから寄贈された。かつて昭和44年度の大先輩たちが全国大会に出場したおりに白だったのになぜ赤に変わったのか、なぜ、その後、臙脂・黄色が寄贈されたのか、当時部に在籍していても知らなかった。今回、松崎君たちのおかげですばらしいホームページができ、現役の活躍、東高ラグビー部の歴史、なつかしい皆さんの消息、などなど見聞きできるように、往時を懐かしむこと、現役の活躍や先輩・同輩・後輩の活躍に刺激を得ることができるようになった。ジャージの変更に至る諸事情についても、松崎君のおかげでその一端を知ることができた。以下、私が在籍した昭和51年卒の「仙波組」の私なりのなつかしい思い出である。

入部のときは、監督は高橋俊三先生。2年になったときに井手盛章先生が俊三さんの後を継がれ、渡部正治先生もコーチに加わられた。井手先生は、頼りになりなんでも相談できる兄貴という感じで、日々の練習に行くのが重荷ではなくなった記憶がある。バックスのサインプレーにも、井手先生の愛妻「町子さん」が使われた。一方、渡部先生は、当時はやった映画「グリズリー」を想起させる体格で、当時素敵な奥様と結婚されるに当たって、「美女と野獣」という言葉そのままと皆で言いあったことを思い出す。お二人とも「楽しく」がもつうで、ただ走るだけのランパスの替わりに走力の拮抗した者どうしの競走を取り入れたり、しっかりと練習一つ一つの意味をわかるように説明していただいたりした。

運動能力の高さと人望で部を率いたナンバー8 仙波主将、ラグビー探求へのこだわり、気取らない当意即妙な人柄でバックスリーダーをつとめたフルバック石田副主将以下、同期が13名を数えた。ナンバー8も器用にこなした愛媛選抜チームにも志願して出たブロップ井門、からだは細かったがラックやモールの中の激しいプレーや凄みのある声とにらみで相手をびびらせたフッカー椋垣、途中入部ながら天性のセンスと機智でレギュラーを掴んだロック玉井、フォローのコース取りや球際のうまさが見事なフランカー谷川、野生味あふれた執念のタックルとフォローのフランカー福岡、後に練習好きに大変身しあの名門サントリーで早稲田大学OB本城らとプレーした司令塔スタンドオフ忽那、俊敏で安定感あふれるプレーで攻守の要となり今も走り続けるセンター玉乃井、対面の足首に突き刺さるタックルと100m 11秒台の快速ウィング平田、小気味よいステップで敵陣に切り込んだウィング池内、冷静なパスと安定したタックルでチームに貢献し今は世界有数の物理学研究者として世界の科学技術に貢献するセンター倉田、と多士済々のメンバーだった。

当時、仙波組が新人戦、総体、四国大会で優勝という成績を収められたのも、よき指導者に恵まれたおかげで、同期13名の力が発揮されたのだと思う。

さて、ジャージの話だが、当時は、ジャージ赤、パンツ紺が東校の正式なものと思っていた。上が黄色臙脂のストライプ、下が白が、もともと松中・東高伝統のものであったが、昭和40年代には濃緑に赤線、花園出場時には上下白のジャージに変っていたこと。そしてOBの方々の話し合いの中で、伝統の臙脂と黄色の復活を願う声が高まり、OBから黄色臙脂のジャージが寄贈されたことは、松崎君から聞くまではまったく知らなかった。

実は、東高ホームページに載せてくれている中川泰彦さんについては、今も忘れ得ない思い出がある。第一に、私は、当時、中川さんのお葬式に参列している。中川さんは、確か愛媛大学付属中学の出身で、当時、私は同中学の生徒会関係者の一人だったのでお葬式に出席したが、本当に多くの学生の人たちが焼香に来ていて、中川さんの人望のあつさに驚かされた。

そして、縁あってか、私も東高でラグビー部に所属することとなった。高校2年生のころだったか、愛媛新聞に中川さんのお母様が読者の欄に投稿されていた。泰彦さんのお墓に定期的に花や線香が手向けられている、きっとラグビーの仲間の皆さんが来てくれているのだろう、仲間の皆さんに支えられ、今も息子は天国でラグビーボールを追っているだろう、というような内容だったと、うろ覚えながら記憶している。

当時、その記事を読み、確か切抜きをし、日記に書いたことを記憶しているが、もう手元にはない。今回、東高ラグビー部ホームページで、中川さんの寄贈の旗やお母様の投稿の記事を再び読むことができた。今読み返しても、わが子の死というこの上なくつらい経験をなさったお母様と中川さんを追慕することを忘れなかった当時の東高の先輩たちとの感応相称のさまを憶念することができた。

「勉強ばかりが万能ではない。」「情け厚い友情」「温かい春風のような心洗われる場面」などのお母様の言葉は、仕事に追われ、中学進学学齢期の子供を持つ現在の私の心にも厳しく響く。中川さん、そして先輩方に連なるもの一人として、仕事や勉強よりも大事なものを忘れないで仕事に、家庭に、日々の付き合いに励んでいきたいと思う。

(記念誌WG注 この臙脂と黄色のジャージは、これを着た試合で不思議と怪我が続出したためしばらくお蔵入りとなってしまった。数年後、再び日の目を見ることとなるのだが、そのいきさつについては野本聡さんが以下のように記してください)

【書き下ろし】

e) 「黄 × エンジ」の復活

野本 聡 (S55 OB)



私は大学卒業後、愛媛県の県立高校の教員として高校生にラグビーを教えている。平成18年現在、愛媛県の高等学校体育連盟の専門委員として高校生のラグビーに関する種々の活動にも携わっている。高校においても大学と同じように伝統校と言われるチームには伝統のファーストジャージがある。例えば愛媛県内でいえば、新田高校なら「紺色」、松山商業なら「白と黒の縞」などである。そして母校の松山東も歴史と伝統があり、オールドファンはもちろん、最近でも四国大会で優勝するなどの活躍で知られている。そして、四国内ではその存在も多くの高校ラグビーファンにも認められ、「黄色とエンジの縞のジャージ」と言えばすぐに松山東と認知する人は多い。私もこのジャージを着て闘ったものだが、当時の記憶をたどりながら、このジャージの思い出について書いてみる。30年近く前のことなので、一部記憶が正確でない点は勘弁していただきたい。

昭和52年4月、高校入学と同時にラグビー部に入学した。もともと、高校入学後にラグビーをすることは中学1年の時から決めており、高校入学前の春休みから何度か練習を見学していた。私が松山東を選んだのは次のような経過である。中学校3年生の担任の先生から「県立高校でラグビーが一番強いのは松山東高校、私立高校では新田高校。」と聞かされ、とりあえず両校を受験することにした。県立高校の入試前の2月に県新人大会の決勝戦があり、松山東対新田の試合が堀之内の県営ラグビー場で行われた。どちらかの高校でラグビーをしたいと思っていた私は、受験勉強そっちのけで父と観戦に行った。スコアはかなり開いたように思う。新田高校の圧勝だった。この試合で最も印象に残ったのが、FBをされていた鈴江先輩のタックルであった。頭を打ってふらふらになりながら、果敢に新田高校の選手めがけて飛び込む姿に心を打たれた。私がラグビーに興味を持ったきっかけが、テレビで早慶戦を見て、当時小さな体の早稲田の選手が、大きな慶応の選手にタックルしたからで、ちょうどその時の試合が脳裏によみがえった。高校受験はうまくいき、両校に合格できた。強い新田高校でラグビーがしたいという気持ちもあったが、周囲の勧めから松山東高校を選んだ。

当時の東高は、生徒会費で部のユニホームを作ってもらっていた。ユニホームの傷みが激しい野球部・サッカー部・ラグビー部は2年に1回、他の部は3年に1回のペースだったと覚えている。

私が1年生の秋に、一つ上の菊池光隆先輩がキャプテンをされていた代の人が、紺を主体とし赤と白の横線が入ったジャージを作った。その時からこれがファーストジャージとなり、それまで使っていた赤一色のものがセカンドジャージになった。まだ1年生だった私は、各チームには伝統があるユニホームがあるなどというジャージについての特別な知識もなく、こうやって新しいジャージが作られる度にユニホームが変わるものだと思っていた。

2年生の夏からキャプテンを任せられ、打倒新田に向けて日々練習をした。私たちの代はジャージが新調できる年ではなかったので、ジャージについては特に意識をしたことはなかった。

当時は5月のゴールデンウィークに行われていた四国大会で優勝する事を最大の目標として活動がなされていた。そのため、春休みを利用して3泊4日程度の合宿を行っていた。宿泊は樽味公民館、食事は学校前のまどか食堂、風呂は銭湯か道後温泉という具合である。

合宿中のある日、当時の監督の井手盛章先生に、副キャプテンの三好啓介と数名の3年生共に体育教室内に呼び出された。話の内容は人事異動で井手先生が八幡浜高校へ転勤するという事と、これからのラグビー部の運営についてであった。2年間指導して下さった井手先生が転勤でいなくなるというショックで話の内容はほとんど覚えていない。ただ、話の最後にガムテープで密封された段ボール箱を取り出され、その中に封印された黄色とエンジの段柄の古いジャージを見せていただいたことはよく覚えている。胸には縮んだ校章のエンブレムが縫いつけてあった。昔の生地なのでほとんどのジャージが縮んでおり、部分的に虫に食われてもいた。時代遅れの生地だが、デザインはすごく気に入った。さらに井手先生から、これは昭和50年頃に試合用のジャージとして使われていたものである。そのデザインは松山中学時代から使用していたジャージのものであり、このジャージは松山中学のOBの方から寄付された物であることと、これが東高の伝統のジャージであることを聞かされた。しかし、このジャージは言わば「呪われたジャージ」で、これを着て試合をすると、不思議と大怪我をする選手が続出したため、昭和50年を最後に使われなくなったとの説明も受けた。

不思議な気持ちだった。段ボール箱から出てきたジャージから、過去の先輩達のラグビーに対する思いが伝わってきた。先輩達が築き上げた伝統の重みからだ全体を覆われた気がした。そして、このジャージを着て試合がしたいという欲望にかられた。早速部員全員を集めて体育教室内での話を伝え、全員一致で「黄×エンジ」のジャージを公式戦で着ることにした。井手先生も初めは怪我のことが心配で反対されたが、最後には我々の意見を聞いて下さり、試合で着ることを承諾して下さった。「黄×エンジ」ジャージが、ファーストジャージとして正式に復活した瞬間である。

昭和54年の4月から新任の白石隆保先生を監督として迎え、このジャージと共に闘いが始まった。新人大会で準優勝だった東高は、4月の四国大会県予選でも順当に決勝戦まで進み、宿敵新田高校と対戦した。もちろん「黄×エンジ」のジャージを着てである。新人大会の決勝では大敗した新田高校が相手であったが、スクラムの安定とBKのディフェンス力の向上を目標に行った春合宿の成果と、過去の先輩達が新田高校と対戦した時の思いのこもったジャージのおかげで、当時の得点で6対14(トライ数1対3)と善戦した試合だったと記憶している。その後もこのジャージで試合に臨み、優勝こそできなかったが、5月の四国大会でBブロック準優勝、6月の県総体でも準優勝の成績を残した。

一つ下の辻キャプテンの代がユニホームを新調する時、もちろんこのデザインにしてもらい、胸の校章を刺繍にしたジャージを作らせた。以後27年間、東高のファーストジャージは「黄×エンジ」が続いている。我々が着たこの時の古いジャージは、当時の監督の白石先生の計らいで、当時の2・3年生部員に配られた。高校時代の古いジャージはすべて処分したが、背番号12のこのジャージだけは今でも実家のタンスの中に保管してある。一人のOBとして、そして対戦相手の一監督として、今年もまた伝統ある「黄×エンジ」のジャージを着た先輩達がグラウンドを縦横無尽に走り回り、ますます活躍することを祈念している。

OB会(後援会)による臙脂と黄色ジャージの寄贈

6.1 松中東高ラグビー後援会(1975)

松山中学校ラグビー部の最長老ですので御挨拶いたします。

二神 軍四郎

私達の後輩松山東校ラグビー部の活躍を聞くと、今更の様に若かりし当時の思いにひたります。

頭の髪は白いものばかり、いやなくなりかけた事を忘れて、あの道後のグラウンドでラグビーの一から教えられて走ったあの当時が今昔の感です。もう、この年となつては自分達の中に生きているラグビー精神、大先輩の二宮先生はじめ藤井先生其の他の御指導いただきました諸先生方の御意志を後輩に伝えて行き、又良き選手の出来るよう後援してゆく事が我々の使命の様にも思います。長年、松中ラグビー部の blanks 的時代を此れを機会に結んでいただき愛媛のラグビーは松中ラグビー部を母体として発展して参ったのですからお互いの微力を結合して、愛媛のラグビーの向上に尽すことが出来ればと考え発起した次第でした。所が早速に御賛同いただき、御援助いただきまして誠に有難うございました。発起人を代表致しまして、厚く感謝の意を表します。ここに現在までの状況を御報告いたしまして御了承願つたらと思います。なお旧友の住所録ともなりまして、再会の機会でも出来ますれば更に幸いに存じます。

昭和50年8月

松山中学校ラグビー部後援会 発起人一同

ラグビー同志 御一同様

寄付金	662,000
郵送料	3,960
後援会印鑑	4,100
東高寄付	
タックルマシン	33,000
試合用ユニフォーム	177,000
新人大会(高知)遠征補助	60,000
慶弔費	5,000
支出計	283,060
残金	378,940

(記念誌WG注:このユニフォームが復活した臙脂・黄色ジャージ。グラビア参照)